

龍谷講座×里山学研究センター シリーズ「伏見のいきものを知る」の実施報告

龍谷大学政策学部・講師 里山学研究センター・研究員
谷垣 岳人

2017年度後期龍谷講座では、里山学研究センターとの共催により、伏見の里山の生きものたちを紹介する室内講座を3つ、野外実習を1つ実施した。野外実習は、さらに「伏見連続講座～ふれて、しって、みて伏見～」の連携講座として実施した。室内講座は、いずれも龍谷大学深草学舎21号館603教室にて13時30分から15時まで実施した。各講座の定員は200名で事前申し込み不要かつ無料で実施した。野外実習は、伏見稻荷大社にて17時30分から19時30分まで実施した。定員は35名で事前申し込み必要かつ無料で実施した。以下に講演要旨と参加人数（アンケート回収数）を報告する。

第1回：2017年10月7日（土）

「京都の里山と昆虫たち」谷垣岳人（龍谷大学政策学部講師）

本講座では、人の暮らしを支えてきた里山の歴史や、そこに暮らす昆虫達について紹介した。広義の里山には、水田などの農地や、薪炭の材料となる木材などを採取する里山林が含まれる。水田は、自然湿地の代替湿地として機能しており、本来多様な生物が生息する環境である。地域の子どもたちは、田んぼや水路を網で「がさがさ」しながら生き物探しをしてきた。しかし近年、圃場整備や農業スケジュールの早期化や農薬の使用などにより、水田からは多くの生き物が消えていった。里山林を構成する樹種のうち、クヌギは多くの樹液を出すためカブトムシやクワガタムシ（げんじ）の格好のえさ場であった。げんじ採りを通じて、子どもたちは樹液に集まる昆虫の名前（図鑑に載っている和名ではなく「あだ名」）を覚えてきた。つまり、人の暮らしに利用されてきた里山は、多様な生き物の生息場所でもあり、子どもたちの昆虫採集文化も醸成してきた。しかし、戦後の薪炭利用の減少に伴い、クヌギやコナラは大径木となり、東山では2006年頃からナラ枯れの被害を受けるようになった。朽ちたナラ枯れ被害木は、カブトムシやクワガタムシの格好の発生源になり、思わぬ形で里山の生き物の賑わいが戻っている。講座アンケートの回収数は87であった。

第2回：2017年10月21日（土）

「伏見とかかわる身近な鳥、渡りをする水鳥たち」須川 恒（龍谷大学非常勤講師）

鳥類学者が「伏見」を見るとどう見えてくるのかをテーマに、まず野鳥観察入門の話をし、渡りをする鳥類の生態解明の面白さを話し、また野鳥と文化や保護についても触れた。龍谷大学深草学舎で文系学生向けにやっている講義のさわりの紹介である。また、かつて京都教育大

で鴨川全域で行った越冬水鳥の調査実習の結果についても紹介した。講演内容は以下の6点であり、内容をそれぞれ少し紹介する。

1. 野鳥観察入門 小学生から大学生まで：身近な野鳥のイメージを持つことによって、野鳥を通して自然が見え、季節が実感できるという基本を話した。
2. 伏見稲荷大社における探鳥 野鳥と文化：前日に学生に体験してもらうことができた伏見稲荷大社における野外実習の内容を紹介した。伏見稲荷ではスズメの焼き鳥が名物である一方、稲荷周辺に「深草雀」といった和菓子が売られているように、スズメを愛する文化もある。
3. 「伏見」、過去の湿地と野鳥への手がかかり：学生への講義中に「(深草学舎のある)「伏見」は誰(何)が何を伏し見ているのか、おもいつくことを書け」と質問するとさまざまな回答がある。万葉集にある柿本人麻呂の「巨椋(おおくら)の入り江響(どよ)むなり射目人(いめびと)が伏見が田居に雁渡るらし」を通して、かつて巨椋池を飛び立った雁の大群を伏し見ている狩猟者がいたこと、龍谷大学と関係の深い西本願寺の書院に「雁の間」があり、江戸時代初期の湿地の様子の手がかかりが得られることを紹介した。
4. 都市河川としての鴨川と水鳥：市街地を流れる鴨川に、1970年代半ばからユリカモメ(古称は「都鳥」)が多数越冬を開始し、また1980年代末から鴨類が越冬を開始し、鴨川は文字通り「鴨」川となった。ユリカモメは8千羽まで越冬数が増加したが最近では減少傾向にある。鳥類標識調査や発信機を使った調査によって明らかになったユリカモメとカモ類のダイナミックな渡りを紹介した。
5. ツバメの集団ねぐらとなる宇治川向島のヨシ原：夏から秋にかけて伏見南部で観察されるツバメの集団ねぐらを、ツバメの営巣・渡り・越冬という広い視点から紹介し、ヨシ原保護の重要性を指摘した。
6. 未来へむけての課題：「巨椋池など貴重な湿地が、20世紀の間に破壊された。これらの湿地の価値を再認識し、湿地の再生を模索することは、今後百年かかるかもしれないが大切な課題と考える。」と講演を閉めた。

講演後の質疑では、ツバメ、コシアカツバメ、ユリカモメの減少についての質問があった。鳥類の生息状況はどんどん変化しているので、継続的に調査をして実態を把握することがまずは重要だと答えた。講座アンケートの回収数は75であった。

第3回：2017年11月18日(土)

「伏見に暮らすけものたち」好廣眞一(龍谷大学名誉教授)

講演内容は以下の5点であり、内容をそれぞれ紹介する。

1. 伏見にくらす/くらしただけものたちの標本を会場に並べた：ムササビ、テン、ハクビシンの剥製、イノシシ、ニホンジカ、キツネ、タヌキ、他の頭骨や骨格を並べ、見て、触れてもらった。
2. 伏見のけものクイズ3題：Q 1. 日本には何種のけものがいますか？、Q 2. 伏見には何種のけものがいるでしょう？、Q 3. けもの2つの大きい特徴は？それぞれ答えてもらった。
3. 3種類のけものたち…世界にはA. 卵を生むけもの(原獣類)、B. 超未熟児を生み、体外の袋で育てるけもの(有袋類)、C. 子宮内でかなり育てた子どもを生むけもの(真獣類)がいる。世界を、住んでいる動物の組み合わせで7つに分けた動物地理区で見ると、AとBは

オーストラリア区と新熱帯区（中・南米）だけにいるが、Cは7つの区すべてに分布している。

4. 日本のけものたちは、成り立ちから、3つの地域に分けられる（表1）。①と②は世界7つの動物地理区の旧北区、③は東洋区（アジア熱帯区）に属す。…①北海道：1万年前まで、ユーラシア大陸と繋がる北海道半島だった。他方、本州とは繋がらず。大陸との共通種17種が日本では、ここだけに住む。ヒグマ、クロテン、ナキウサギ、他。マンモスの化石も、日本ではここだけ。/津軽海峡（ブラキストン線）/②本州・四国・九州：最終氷期の終わる14万年前までユーラシア大陸と繋がらず、30万年間ほど孤立したため、独自に進化した固有種が24種（38.8%）と多い。ここに伏見あり。ニホンカモシカ、ノウサギ、ムササビ、リス、ニホンザル、モグラは地域固有種で、ヤマネ、ヒミズ、ヒメヒミズは地域固有属/トカラ海峡（渡瀬線）/③奄美群島・沖縄諸島・先島諸島・小笠原諸島：②とは100万年以上前に分かれ、その後ユーラシア大陸とも離れたので、固有種、固有属が多い。イリオモテヤマネコなどは地域固有種（58.3%）。アマミノクロウサギ、トゲネズミ、ケナガネズミは固有属。海獣ジュゴンやオオコウモリもいる。属は科と種の間単位。イヌ科の中にイヌ属、キツネ属、タヌキ属があり、イヌ属の中にイヌ、オオカミ、ジャッカルなどがいる。

表1. 日本の哺乳類の地域別種数と固有度

地域	地域固有種（固有属）	日本固有種	大陸との共通種	計	動物地理区界
①北海道	1 (0)	4	38	43	旧北区
②本州・四国・九州 (対馬・隠岐島・佐渡島を含む)	24 (3)	4	35	63	
③南西諸島・小笠原諸島	14 (4)	1	9	24	東洋区（アジア熱帯区）
計	39 (7)	4	54	98 (7)	

39 + 4 = 43種が日本固有種で、98種の43.4%、日本固有属は7つもある。小宮（2002）より作成

5. 伏見のけものたち

- (1) ムササビ（齧歯目リス科）…本州・四国・九州の固有種。夜樹間を滑空し、昼は樹洞や天井裏で睡眠、休息。植物食（木の葉、葉、花、果実、種子）。古来狩猟され、縄文遺跡からも出土。「京都では、近郊のお寺や神社の森にはたいてい住んでいます。夜しか動き回らないので気づかない人が多い（川道武男）」。1980年代はじめ、北区太田神社、上賀茂神社、左京区法然院でムササビ観察会開かれる。2000年代はじめ、好廣、伏見稲荷大社神田付近で、ムササビの食べ跡、フンをはじめて見る。1976年より毎年学生の森林観察実習を行ってきたのだが。三辻上の茶店で、「ムササビが天井に巣作りし、毎晩森に飛んでいた」と聞く。2005年頃、相良直彦（京大名誉教授、龍大非常勤講師）大社内でもムササビの死体回収。2010年頃、小学生が木から落ちたムササビの子どもを持っていた。2015年上西実（龍大非常勤講師）ムササビを見る。以後密に観察。ムササビは2000年代はじめ頃、伏見稲荷大社に分布を拡げてきたらしい。
- (2) ノウサギ（ウサギ目 ウサギ科）…本州・四国・九州固有種。草原、森林にくらす。植物食。草や葉、若葉、樹皮を食べる。夜行性。巣作らない。通っていた伏見区丹波橋の小

学校校歌に「(冬) くるぶし会にウサギ狩り」あり。6年生の冬、ウサギ狩りを体験した。丘の下から子どもたちが棒で地面をたたいてウサギを追いあげ、網で待つ教師が棒でたたいて取る。この時は取れず、寒い中のウサギ汁?はうまかったがブタだった。かつては農閑期に行われた村総出の行事。

- (3) イノシシ (鯨偶蹄目 イノシシ科) …ユーラシア大陸と近辺の島に広く分布する雑食者。主に夜行動する、狩猟獣。伏見稲荷大社でよく見られるようになったのは、3-4年前から(上西実)。うまい肉、かつ田畑を全滅させる害獣として追われ、狩られるが、稲荷大社では追われず、食物が手に入りやすく、体を休める竹林もあるため居付いているのだろう。次のニホンジカ共々、かつては偶蹄目とされていた。ところが20年ほど前、遺伝子やゲノム(遺伝子情報の総体)の研究から、クジラ類に最も近縁な現生哺乳類はカバだと定まり、鯨偶蹄目が新たに設けられた。ちなみに、シカのほうがイノシシよりクジラ類に近縁だ。
- (4) ニホンジカ (鯨偶蹄目 シカ科) …日本列島3地域と中国東部に分布し、中国では梅花鹿^{メイホアルー}と呼ばれる。小鹿に顕著に見られる白斑を、梅の花に見立てた。植物食で主に朝夕に行動するが、交尾期は夜中心に暮らす。イノシシと共に、古来狩猟獣の中心だ。
- (5) キツネ (食肉目 イヌ科) …北半球ほぼ全域に暮らし、肉食性の強い雑食者。主に夜行動する。巣穴を掘って、巣を作り、母子とヘルパーで暮らす。ヘルパーは前年やそれ以前に生まれたメスで、自分の子どもを持たず、母のもとで妹、弟を育てる。
- (6) タヌキ (食肉目 イヌ科) …北海道・本州・四国・九州とユーラシア大陸東部に分布していた。1927年毛皮獣としてロシア西部に移入され、50年後フランスまで広がる。雑食で夜行性。自分で穴を掘らず、アナグマなどが掘った穴や、くぼみを利用して出産、子育て。一夫一妻で暮らし、オスは出産期はメスに食べ物を運び、生まれた子どもを世話し、遊び相手となる。いくつものタメフンで近辺の他のタヌキと交流するため、タヌキ道ができる。
- (7) イエコウモリ (アブラコウモリ) (翼手目 ヒナコウモリ科) …本州・四国・九州・南西諸島とユーラシア大陸東部に分布。伏見の街中にも暮らし、夕暮れに飛び出してたくさん蚊や蛾、甲虫をつかまえる。龍谷大キャンパスでも飛び回り、光に集まる昆虫を捕える。死体も2度、3度拾った。
- (8) ニホンザル (霊長目 オナガザル科) …本州・四国・九州の固有種。植物中心の雑食者で、キノコや昆虫も好む。昼行性。1996年10月22日-11月21日の間、比叡山B群28頭の群れが突然大移動し、伏見区に入り、11月2日に名神高速道を渡ってメス1頭ワカモノ2頭が死んだ。群れは11月3日から伏見区、山科区でカキや畑の野菜を食べて、11月18日に再び大移動して比叡山に戻ったが、この時は名神がトンネルに入る上を通り、事故死せず。
- (9) トウヨウゾウ (長鼻目 ステゴドン科) …伏見区深草鞍ヶ谷と山科区小栗栖でトウヨウゾウ、ステゴドン・オリエンタリスが発見されている。

講座参加者は80名ほど、アンケートの回収数は49であった。

野外実習：2017年11月10日(金)

「夜の野生動物観察会」谷垣岳人・須川 恒・上西 実

JR稲荷駅最寄りの鳥居前に17時30分に集合し、十石橋から神田に回り、稲荷大社及び稲荷山で見られるほ乳類を中心とした野生動物(ムササビ・キツネ・タヌキ・イノシシ・イタチ・アライグマ・ハクビシンなど)について、写真パネルを使いながら生息状況や生態を解説した。

解説の途中にムササビの親子が現れたため観察した。さらに八島ヶ池経由で新池（熊鷹社）まで参道を歩いた。新池では、カラスが火の付いた蠟燭を運ぶことで不審火が発生していることなどを解説した。奥社、千本鳥居経由で集合場所のJR稲荷駅前の鳥居へと戻り19時30分に解散した。参加者は34人であった。